

45 自宅退院した脊髄損傷者の生活の再構築のプロセスに関する調査

病院 看護部 3階西病棟 中島智也、松田由美、澤田理紗

【目的】脊髄損傷者は様々な障害をもち、受傷前と同様の生活を営むことが困難となるため、どのようにして生活を再構築しているのか疑問に思った。そこで本研究では、自宅退院した脊髄損傷者の生活の再構築のプロセスを当事者の体験として明らかにすることを目的とし、より具体的な生活者としての視点から退院後に予測できる課題を抽出することによって、入院中の患者教育への示唆を得ることができると考えた。【方法】A病棟に令和3年7月～令和5年6月の間に入院し、自宅退院して3ヶ月から1年6ヶ月程度経過した、全介助の高位頸髄損傷者を除く頸髄損傷者3名、胸髄損傷者2名の計5名に半構造化面接法を行った（平均面接時間51.8分）。データの分析は逐語録を作成し、脊髄損傷者の退院後の生活の再構築に関する部分を抽出した。類似したコードをまとめ、その意味を表すようにサブカテゴリーをネーミングし、カテゴリーに集約した。【倫理的配慮】本研究はB病院倫理審査委員会で審査を受け承認を得て実施した。対象者へ本研究の趣旨、参加の自由、調査以外の目的で使用しないこと、個人が特定されないよう研究用IDを用いてデータ化することを文書で説明し同意を得た。【結果】退院後の生活の再構築のプロセスを入院から退院数カ月後まで、退院数カ月後から現在、未来の3期にわけ、14個のカテゴリーを『』で示す。入院から退院数ヶ月後までは、『入院中に獲得したADLの継続』をして試行錯誤しながら生活し、『退院前後の課題』に直面しながらも、『社会資源の活用』をして生活していた。『新たな人間関係の構築』をしながら『生活圏の拡大』をしていたが、『受傷による変化の実感』もしていた。退院数ヶ月後から現在では、独自の工夫を取り入れながら『生活様式に合わせたADL』に変化していた。『新規または継続している課題』がありながらも『社会資源の追加と継続』を検討して他者のサポートを受けながら生活していた。この時期には外出の範囲が広がり『生活のさらなる拡大』を図っていたが、『新たな人間関係の継続の有無』には人によって差があり、『受傷による変化に対する心の反応』もみられていた。未来は、『目標管理』をしていたが、『目標の障壁となるもの』もあった。【考察】日常生活動作の再構築のプロセスは、獲得したADLを継続しながら自分に合った方法を見出す時期から始まった。できることが増えると、成功と失敗を繰り返しながら自分なりのADLへ変化させていた。退院後は外へと視野が広がる時期でもあり、散歩や近所の外出から、車での外出やライブ等の余暇活動を楽しんでおり、様々な経験を重ねることで生活が再構築され则认为る。心理社会面の再構築のプロセスは、今後の生活に対しての不安や迷い、戸惑いや落ち込みを経験する時期から、受傷による変化を感じながらも家族やサービス等の支援を受けて生活を再構築していた。成功体験をモチベーションの維持にしつつ、失敗体験からは次の目標をたてることを繰り返しながら生活を再構築していた。脊髄損傷者はいかに折り合いをつけながら自分の役割や生きがいを見つけられるかが今後の生活に影響を及ぼすことが示唆された。